

第17回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



小学生の部 優秀賞 受賞作品

『さすらい』

愛媛県

愛媛大学教育学部附属小学校

二年 若狭 早

さすらい

愛媛大学教育学部附属小学校 二年

若狭 早（わかさ そう）

今日もバスにのって、小学校へ通う。小学校までかた道四十分。バスにのっている間、ぼくはずっとまどの外を見ている。同じ道を走っていても、見えるけしきは毎日ちがう。空の色、雲の形、となりを走る車。とくにお気に入りのものは、けんちく中のたてものだ。バスのせきは高い場しよにあるので、とくとうせきで見ることができぬ。

まどの外を見ながら、ぼくは小学校のことも考える。かんさつ池の生きものは元気だろうか。休み時間に何してあそぼうか。今日のおきゅう食は何回おかわりできるだろうか。そうしていると、あつという間にバスはとうちやくする。遠くからぼくを見ると、ただぼうつとっているように見えるかも知れない。ぼくのお母さんは、そんなぼくのことを、

「さすらいの早ちゃん。」

とよぶ。なかなか、かっこいいひびきだ。

さすらいとは、さまよい歩くこと、気もちがさだまらないこと。じしよでしらべて、ぼくはお母さんのことばが「皮肉」だったことに気づいた。お母さんの話をきちんと聞いていないことが分かってしまうじ、

「さすらいの早ちゃん、もどつて来て。」

こう言われることがある。

ただ、ぼくには考えることがたくさんある。とくにあそんでいる時は、頭の中が大いそがし。何をどれだけあそぶか、どうやったらもつと楽しくあそべるか、あそぶじゅん番も考えるひつようがある。あそぶことに気もちがさだまっているから、ほかのことが頭に入らないだけなのだ。

だから本当はさすらっていない。それでも、かっこいいひびきはそのままのこしたい。そこでぼくは「さすらい」を自分のキャッチフレーズにしようときめた。その方がお母さんも、やれやれというかんじでぼくをよぶからだ。